



流浪の月

2022年/日本映画
配給：ギャガ/150分

2022 (令和4) 年5月28日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

監督・脚本：李相日
原作：『流浪の月』 凧良ゆう
出演：広瀬すず／松坂桃李／
横浜流星／多部未華
子／趣里／三浦貴大
／白鳥玉季／増田光
桜／内田也哉子／柄
本明

👁️👁️ みどころ

人気小説を人気監督が、広瀬すず×松坂桃李のダブル主演で映画化。そのテーマは、「< 女兒誘拐事件 >—ふたりしか知らない、あの夏の< 真実 >。」だから、こりゃ必見！

そう思ったが、弁護士歴50年近くの私の目には、何じゃこれは！映像も音楽も美しいが、肝心のストーリーがこれでは・・・？そもそも、なぜこれが誘拐、監禁に？

それから15年。『オールド・ボーイ』（03年）のそこから始まる復讐物語はメチャ面白かったが、本作に見る“被害女兒”と“誘拐犯”の再会から始まる物語は？？？邦画の劣化ぶりを改めて再確認。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆李相日監督作品は、『悪人』（10年）（『シネマ25』210頁）も『怒り』（16年）（『シネマ38』62頁）も面白かった。また、本作は、広瀬すず×松坂桃李の2人が主演。私は、原作者の凧良ゆうは知らなかったが、「本屋大賞受賞の原作」と聞けば、こりゃ必見！

他方、本作のチラシには、「女兒誘拐事件。—ふたりしか知らない、あの夏の< 真実 >。広瀬すず、松坂桃李で贈る、“許されないふたり”の宿命は、愛よりも切ない。」とある。そして、本作は、「帰れない事情を抱えた少女・更紗と、彼女を家に招き入れた孤独な大学生・文。」の物語らしいから、松坂桃李は大学生役？『孤狼の血 LEVEL2』（21年）（『シネマ49』154頁）の何とも男臭い役で“動の演技”を見せた松坂桃李だったが、本作ではそれとは正反対の“静の演技”を・・・？

◆李相日監督は、『アフター・ウェディング』（06年）（『シネマ16』63頁）等で観たデンマークのスサンネ・ピア監督と同じように、クローズアップを多用する傾向が強い。冒頭、19歳の大学生・文（松坂桃李）と10歳の少女・更紗（白鳥玉季）がそれぞれク

ローズアップで映される。そして、舞台となる公園を映し、樹々を映し大空を映し出す中、急に雨が降り始めたところで、やっと2人の出会いが描かれる。

それはそれで美しい情景だし、ストーリーの枠組みとしてもよくわかるが、そもそもわからないのは、なぜこれが女兒誘拐事件になるの？ということ。監禁モノの“名作”としては、『完全なる飼育 秘密の地下室』（03年）（『シネマ3』362頁）、『完全なる飼育～女理髪師の恋～』（03年）（『シネマ9』348頁）等があるが、本作における文による更紗の監禁を見ていると、それらとは全く異質で、犯罪性は全く感じられない。50年近くの弁護士経歴を持つ私が文の刑事弁護人に就任すれば、間違いなく無罪獲得事件だ。そんな思いがあるため、本作のストーリー展開には最初から違和感が！

◆それから15年後。パク・チャヌク監督、チェ・ミンシク主演の『オールド・ボーイ』（03年）（『シネマ6』52頁）では、15年後にいきなり釈放されるところから“復讐物語”がスタートしたが、本作の「それから15年後」の、更紗は、レストランでバイトをしながら恋人の中瀬亮（横浜流星）と幸せそうに暮らしていた。李相日監督が描いて見せる2人の性生活は順調みたいだし、何よりも亮は優しくそうだから、近い将来、このまま2人は結婚し、幸せに・・・？

他方、ある日、同僚に誘われるまま「カフェ calico」に行ってみると、何とそこでは、あの文が店主として黙々と仕事に励んでいたから、更紗はビックリ！

あれから15年。女兒誘拐事件の被害者としてマスコミの目にさらされ続けた更紗は、今やっとまともな生活をしていたが、誘拐犯としてマスコミの目にさらされた文の、それから15年は？そして今は？

◆『孤狼の血 LEVEL 2』では、広島県警の“悪徳刑事”としてのし上がり、鈴木亮平演じる凶悪ヤクザと、“香港ノワール”、“韓国ノワール”と同じように（？）、とことんやり合った松坂桃李が、本作では全編を通じてほとんどセリフのない、暗い性格（？）の若者・文役を演じている。こんな男が「ロリコン！」と呼ばれるのは、今の日本社会では止むを得ないが、「同性愛（同性婚）の何が悪い！」と堂々と言える今、「ロリコンの何が悪い！」となぜ堂々と言えないの？ロリコンと女兒誘拐とは明らかに違うはずだ。ところが、本作は、「ロリコンの何が悪い！」と言うことができず、一方的に世間の非難が集中するのは当然という前提で作られている。それって、おかしいのでは・・・？

◆15年前に19歳の文と10歳の更紗が2カ月間、文の部屋で過ごしたのが、刑法上の監禁罪になるのか否かに疑問があるのは、前述のとおりだ。さらに、本作では、再会した文と更紗が話をしたり、亮と争い居場所のなくなった更紗が文の隣の部屋に引っ越してきたことに、世間（マスコミ）の非難が集中するが、それもおかしいのでは？そのうえ、更

紗の頼みによって、更紗の同僚のシングルマザー、安西佳菜子（趣里）の子供を文が預かり、面倒をみていると、何とこれも誘拐事件にされてしまうから、アレレ？こんな事態になるのは、文の弁解能力に問題があるのかもしれないが、とにかく私には？？

“今ドキの若者”の一種として、文のような男がいても不思議ではないが、なぜ彼はあのような性格になったの？彼のロリコン趣味は一体なぜ？今ドキの若者の“生殖能力”の劣化を嘆く人もいるほどだが、ひょっとして文はあの年にして女性との肉体経験もなし？

そんなこんな疑問はラストに向けて少しずつ明らかにされる、彼の“出自の秘密”を見れば納得だから、それをじっくりと。もともと、私は何度も途中で出ようと思ったほど、邦画の劣化ぶりを実感させられ続けたが・・・。

2022（令和4）年6月3日記